1）診察

	研修医が単独で行ってよいこと	研修医が単独で行ってはいけないこと
診察	A. 全身の視診、打診、触診 B. 簡単な器具（聴診器、打腱器、血圧計など）を用いる全身の診察 C. 耳鏡、鼻鏡、関節喉頭鏡、検眼鏡による診察	A. 内診 B. 膣鏡診 C. 直腸診※ D. 外来診療

※手技に習熟し、指導医の許可があれば単独で行ってもよい。

2）検査

	研修医が単独で行ってよいこと	研修医が単独で行ってはいけないこと
生理学的検査	A. 安静時心電図、Holter 心電図 B. 聴力、平衡、味覚、嗅覚、知覚 C. 視野、視力	A. 脳派 B. 負荷心電図 C. 呼吸機能（肺活量など）※ D. 筋電図 E. 神経伝達速度 F. 眼球に直接触れる検査
内視鏡検査など		A. 直腸鏡 B. 肛門鏡 C. 喉頭内視鏡 D. 胃食道内視鏡 E. 大腸内視鏡 F. 気管支鏡 G. 膀胱鏡
画像検査	A. 放射線管理区域への入退室 B. 超音波検査 内容によっては誤診に繋がる恐れがあるため、 検査結果の解釈・判断は指導医と協議する必要がある。	A. 血管造影 B. 核医学検査 C. 消化管造影 D. 経膣超音波 E. 画像診断報告
血管穿刺と採血	A. 末梢静脈穿刺と静脈ライン留置 血管穿刺の際に神経を損傷した事例もあるので、確実に血管を穿刺する必要がある B. 動脈穿刺 肘窩部では上腕動脈は正中神経に伴走しており、神経損傷には十分に注意する	A. 中心静脈穿刺（鎖骨下・内頸・大腿） B. 動脈ライン留置 C. 小児の採血 D. 小児の動脈穿刺
穿刺		A. 皮下の嚢胞・膿瘍※ B. 深部の嚢胞・膿瘍 C. 胸腔 D. 腹腔 E. 膀胱 F. 腰部硬膜外穿刺 G. 腰部くも膜下穿刺 H. 針生検 I. 関節 J. 骨髄穿刺・骨髄生検
産婦人科		A. 膣内溶液採取 B. コルポスコピー C. 子宮内操作
その他	A. 長谷川式痴呆テスト B.Mini Mental State Examination(MMSE)	A. アレルギー検査 B. 発達テスト C. 知能テスト D. 心理テスト

※手技に習熟し、指導医の許可があれば単独で行ってもよい。